

ひみつのとっくん！

~ナイショにしてね~





少女は、窓から差し込む光で目覚めた手早く着替え、片手で魔法の箒をつかむと人に見つからないようにこっそりと、しかし急いで外へ出た。

「何故って、人に努力している姿を見られるのは好きじゃないの」

誰に言うでもなくそう告げると、魔法の箒にまたがり

「今日こそ完璧に飛べるようになって見せるんだから！」

挑むような視線を空に向ける。呟くように口の中で呪文を唱える。

ふわっと少女を乗せて魔法の箒が浮かぶ。

「いい調子だわ」

と得意気になったのも束の間、ひゅうと吹いた風に取り除かれた瞬間、魔法の箒は浮力を失い地面に吸い込まれるように落ちていく。

「きゃあああっ！」

慌てて両手に力を込めて命じる

「魔法の箒よ止まらなさい！」

地面すれすれで静止したが、心臓はドキドキうるさいほど鳴っている。

その後日のあるうちに何度も練習したが、あまり上手くいなかった。

昨日は失敗だった。意識を魔法の箒からそらせてはだめだと自分に言い聞かせながら今日も飛行訓練に励む。以前姉から聞いたセリフを思い出す。「魔法の道具を使うときにね、道具に直接触れてお互いに心を通わせると上手く扱えるのよ」

「やっぱり触れている面積が広い方がいいのかしら？」

「箒に直接触れる部分と言ったら：手と足と：」

おもむろにパンツに手をかけ、思い切ったように下げた。

ん

「少し恥ずかしいけど…もしかしたら、これで昨日より上手に飛べるかもしれない」

箒にまたがり、いつものように飛び立つ

「何も穿いていないせいかな？変な感じだわ」
箒にある微妙な凹凸が股にこすれる。

「あっ…」

思わず声が出てしまった。

この感じ…なんだろう？

トク…

ひゃん

昨日は一昨日に比べたら少しマシだったように思える。
やはり恥ずかしい場所とは言え、肌が密着したのが良かったのだろうか？
直接肌に触れる魔法の筈の感触を思い出し、一人頬を赤らめる。
いつもの練習場所に向かいながら、ふとした思いつきが口をついて出た。
「もしかしたら、服を脱いだら軽くなって、よく飛べるかも」
そう思いついたら早速試さずにはいられない。

「練習場所までは昨日と同じ恰好で……いいえ、ブラウスだけでも軽くして行ってみましょ。飛んでいたら下から見たらきつと着ていないなんて分からないわ」

ポタ

ポタ



「ここまで来れば大丈夫ね」
辺りには鬱蒼と茂った森が広がっている。

「そんなに高く飛ばなければ問題ないわね」

手早くスカートを脱ぎ、靴を脱いで
「全部脱いでしまったらさすがに少し寒いかもしれない」
と思い、靴下とケープはそのままにして飛び立つ

あ
「……またこの感じ……」
少女のワレメから透明な蜜が溢れ出る。

いつしか箒を伝った蜜が、ぼたぼたと垂れていた。

「や……ん、こすれると……気持ちいい……でも、集中しないと……」
言ったそばから箒は大きく揺れ、森に墜落してしまった。

ポタタ...

幸い、木や草がクッションとなったおかげで、無傷で済んだようだ。
それより、体が疼いて仕方がない。

「どうしてだろう？体が熱い…」

熱に浮かされたように筈の柄をワレメに擦り付ける。

「あ…あ…」

ぐちゅぐちゅと卑猥な水音が静かな森の中に響いているようだ。自然と腰が浮く。
ヌルヌルになった柄が光を反射して妖しく煌めく。

ちゅく
ちゅく

夢中になって腰を動かしていたが、やがて、内部への
刺激を欲しがって内壁が蠢く。

「…へん…だよ、こんなの…」



体の欲求に従い、柄の先を入口にあてがう。
押し広げられたワレメの中に若干の抵抗を受けつつも柄が吞み込まれていく。
「……いた……」

初めての感覚に涙が滲み、挿入する手が止まる。
深呼吸を繰り返し、何とか気持ち落ち着けようとする。

ギョーちち

じゅん

っ



内側の圧に押し出された筈の柄がぬるんと外へ出てきた。
瞬間、足の先から登頂にかけてびりりと電気のようなものが走り、体がびくんと
反応する。

甘くしびれるような感覚が広がり、それがもつと欲しくなる。
再び柄をワレメの内側に収める。今度はすんなりと入っていく。

「…あ、あんっ！」

彼女はいつしか快樂を追って抽送することに夢中になっていた。

ぢゅぽ
ぢゅぽ

ぢゅぽ
ぢゅぽ

あ、

あ、

ぢゅぽ
ぢゅぽ

ぢゅぽ



気が付くと、辺りは暗くなっていた。
「いつの間にかこんな時間になっちゃったのかしら？」
のるのると体を起こし、帰路に着いた。




帰る途中彼女は名案を思い付いた。
「そうだが、深夜なら裸で飛んでいても人に気づかれないに違いないわ！」

翌日、彼女は皆が寝静まるのを待って慎重に部屋を出た。

手早く服を脱ぎ、茂みに隠すと夜の空気をめいいつばい吸い込んでから飛び立つ。

「今日は何だか上手く飛べそうな気がする！」

今までにない解放感を感じながら少女は夜の闇へ消えて行った。



深夜、魔法の杖の樹がある場所に来た私は、
さっそく杖を手に木の根元に座り込んだ。
「魔法の杖の樹、ここで杖と直接接触すれば
魔力が増強されるかもしれない！」

「ものは試しって言うし、何事もやっで
みなくちゃ分からないわ！」

「やっぱり直接杖と接触させた方がいいのかしら？」

は
は

は

魔法の筈の訓練は直接触れさせること
によって……上達した。
だから魔法の杖もこうしたら……

ちゅく
ちゅく
ちゅく





体が熱い！ブラウスの胸元をはだけ、膨らみかけの乳房に触れる。
アソコの刺激とはまた違って気持ちいい。
行為に集中しすぎたせいか杖は手元から落ち、下から青白い光を放っている。
「なにやってるのかしら私！でも、こうすると気持ちよくて！」



夢中になっていると蔓のようなものがするつと左腕に巻き付いてきた。
予想だにしなかった出来事に心臓が止まりそうになった。



パニックになっている間に蔓は次々と絡みついてくる。
私は、抵抗らしい抵抗もできず、空中に釣り上げられてしまった。

しゅる

しゅる

しゅる

「ぎやあああっ」

「っ…何をするつもりなの!?!」

ぎ

ちちち…

っ

ぎ
ちち

巻き付いた蔓が股間を剥き出しにするように脚を広げる。

「いやっ!やめて!」

よく見ると蔓には樹液だろうか?透明な粘液が纏わりついている。

伸びてきた蔓が何かを確かめるように入口を撫でる。
私は、ヌルヌルした冷たい感触に体を震わせながらも、
何とかこの状況から脱出する方法を思索し始めた。

ぬるん、

その間にも多方向から伸びてきた蔓がアソコを広げる。
私は恥ずかしさのあまりに短く悲鳴を上げたつもりが、
耳に届いたのは自らの喘ぎ声だった。
そんな...! 動揺と快楽に思考は散り、巧みな愛撫に全身は昂っていく。

蔓から分泌されている粘液に媚薬効果でもあるのだろうか？
自らの行為では得られないほどの異常な昂りと快感に意識が
吞まれそうだ。



くはあっ

ん♡

あ♡

は

は

太く嬉しい、それでいて先端が卑猥な形状をした蔓がアソコに擦り付けられる。
「まさか、これを入れるつもり!？」

あゝ……

「お願い!それだけはっ!」
涙目になりながら懇願するが相手は聞き入れてくれるはずもなく…そもそも植物が人の言葉を理解するのかしら?

アソコ





「いやっ！……無理っ……ああああっ！！！！」
今まで経験したことのない質量が侵入してくる。

じゅぷぷぷ

ゼクッ

ズ

ズ

「やっつ、くるし…あ、そんな、むり…ひっ…くうっ…」
内壁を擦り上げ、子宮を突き上げられる。絡みついた蔓が乳房や
先端を刺激する…
何人もの人に押さえつけられて犯されているような錯覚が自身を襲う。
甘くしびれるような感覚が繰り返してやってくる。

じゅぽ
にゅぽ
じゅぽ
ぐちゅぽ

躰の昂りも限界まできている
「いっっちゃう！いっっちゃうから！」
膣がぎゅつと締まるのが自分でも分かる。



注挿が一旦止まり、脈を打ったかと思うと、再び奥に打ち付けるようにナカに侵入し、子宮口に先端の触手を擦り付けるような動作をした後、液が膣を満たす感覚が襲う。狭い膣内はすぐに限界を迎え、放たれた白濁した粘液がアソコから勢いよく飛び散る。

全身から力が抜け、抵抗する気力もなくなってしまった。
私はアソコから蔓が引き抜かれるのを呆然と見守っていた。





放心したのもつかの間。体勢を変えられ、
すくさまあのグロテスクな形の蔓たちが追っ
てくる。

ドロツとした感触が太ももを伝って流れて
いくのが分かる。先ほど中に出された液体
だらう。

びく、びく、

ドロツ

びく、

びく、



んーっ

蔓たちは容赦なく侵入してくる。
今度は回と後ろの穴も塞がれた。
「ああ、ひぐっ」
「も、げんが、いっ！ああ、あっ」

ズッ
ゴ

ズッ

ちゅ
ちゅ

びくっ

ん



前も後ろもヌルヌルした蠢く蔓に
塞がれ、私はただ、与えられる快樂に
身を任せるしかなかった！

























































